

基礎研 レター

マレーシア：11年連続で海外ロングステイ希望者の人気度トップ —その観光立国戦略からの示唆—

保険研究部兼経済研究部 主席研究員アジア部長/新潟大学大学院教授 平賀 富一
(03)3512-1822 hiraga@nli-research.co.jp

1—日本人の海外ロングステイ希望国・地域の人気度

2017年4月7日、一般財団法人ロングステイ財団が、日本人による海外でのロングステイ（長期滞在）の希望国・地域の2016年度調査のトップ10ランキング（「ロングステイ希望国・地域2016」）を発表した（図表—1参照）。

図表-1 海外でのロングステイの希望国・地域

	1992	2000	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
1	ハワイ	オーストラリア	マレーシア	マレーシア	マレーシア	マレーシア	マレーシア	マレーシア	マレーシア	マレーシア	マレーシア	マレーシア	マレーシア
2	カナダ	ハワイ	オーストラリア	オーストラリア	オーストラリア	ハワイ	ハワイ	タイ	タイ	タイ	タイ	タイ	タイ
3	オーストラリア	ニュージーランド	タイ	タイ	ハワイ	オーストラリア	タイ	ハワイ	ハワイ	ハワイ	ハワイ	ハワイ	ハワイ
4	アメリカ西海岸	カナダ	ニュージーランド	ハワイ	タイ	タイ	オーストラリア	オーストラリア	オーストラリア	オーストラリア	オーストラリア	オーストラリア	台湾
5	ニュージーランド	スペイン	ハワイ	ニュージーランド	ニュージーランド	ニュージーランド	カナダ	カナダ	ニュージーランド	ニュージーランド	カナダ	フィリピン	フィリピン
6	スイス	イギリス	カナダ	カナダ	カナダ	カナダ	ニュージーランド	ニュージーランド	カナダ	フィリピン	ニュージーランド	ニュージーランド	オーストラリア
7	イギリス	スイス	スペイン	フィリピン	スペイン	フィリピン	フィリピン	インドネシア	フィリピン	シンガポール	シンガポール	カナダ	カナダ
8	フランス	イタリア	インドネシア	インドネシア	インドネシア	インドネシア	スペイン	フィリピン	シンガポール	アメリカ本土	アメリカ本土	シンガポール	シンガポール
9	スペイン	アメリカ西海岸	イギリス	スペイン	フィリピン	スペイン	インドネシア	台湾	インドネシア	カナダ	フィリピン	台湾	インドネシア
10	アメリカ東海岸	マレーシア	アメリカ本土	アメリカ本土	アメリカ本土	アメリカ本土	スイス	シンガポール	台湾	インドネシア	インドネシア	インドネシア	ニュージーランド

（資料：ロングステイ財団2017年4月7日公表資料）

上表のとおり、マレーシアが2006年以来11年連続で首位となっている。

多くの読者にとって、人気の高い観光先の国・地域と言えば、ハワイ、アメリカ本土、オーストラリア、ニュージーランド、カナダや欧州の先進地域、また、地理的に近いアジアの諸国・地域では、台湾、シンガポール、タイ、インドネシア、フィリピン等が想起されよう。その中で、何故、マレーシアが11年の長期にわたり首位のポジションにあるのかについては興味があるところであろう。



2——ロングステイの人気滞在先としてのマレーシアの魅力や要因

ロングステイ財団では、以下のポイントをマレーシアの魅力として挙げている。

①長期滞在査証「マレーシア・マイ・セカンドホーム・プログラム (Malaysia My Second Home Programme: MM2H)」制度の充実、②気候、③治安、④医療水準に加え、⑤ロングステイ希望国トップとしてのイメージが定着していることの5点である。



一方、マレーシア政府観光局は、そのホームページで以下の諸点を挙げている。

A. 1年を通じて温暖な気候：赤道近くに位置し常夏のマレーシアは日中の平均気温が30度前後と温暖な気候なため、冬の寒さや花粉の心配なく過ごせる。

B. 親日的で居心地の良さ：親日的な国民と穏やかな国民性で皆親切。多民族国家の為外国人でもすんなり受け入れてくれる。

C. ブロークンな英語でも意志疎通が出来る：国語はマレー語だが、英語が広く使われているものの、公用語ではないので、「きちんとした英語を話さなければいけない」というプレッシャーがなく、ジェスチャーを交えて意志疎通が出来るのも居心地が良い理由の1つである。

D. 日本人はパスポートで90日まで滞在が可能：日本人は特別なビザが無くても、1度の観光・商用目的の入国で最長90日まで滞在が可能(入国時6か月以上のパスポート残存有効期間があり、かつ90日以内に帰国又は第三国に移動する航空券を有する場合)

E. 最大10年滞在可能な長期滞在ビザを政府が発行：連続して90日以上マレーシアに滞在する場合には「マレーシア・マイ・セカンドホーム」(MM2H)ビザを取得する必要がある、このビザを取得すると最長10年(更新可)マレーシアに滞在することが可能となる。

さらに、同ホームページの別の項では、人口約3千万人のマレーシアは、マレー系・中国系・インド系、そして多数の部族に分けられる先住民族で構成される多民族国家で、それぞれの民族が持つ宗教、生活習慣の融合が独特な文化を生み、マレーシアの魅力を創り出していること、また、のんびりとくつろぐことの出来る砂浜、南国の熱帯雨林、魅力的な島々、神秘的で荘厳な山々など自然美に溢れる国であるとしている。

確かに上記の諸点は、重要なポイントではあるが、競合する他の国・地域と比べて、マレーシアだけが特に傑出しているわけではないとも感じられる。また、マレーシアは、世界遺産などの著名な観光名所や見どころが特に多いわけでもなく、生活する上でのインフラ、便利さ、効率性、サービスの水準・充実度は、ハワイ、オーストラリア、シンガポールの方が勝っているともいえる。

しかしながら、上記調査の結果においては、マレーシアが11年連続でトップの評価を受けているという事実がある。その理由は、ロングステイならではの要件が重要であると思われ、以下ではその観点から考えてみたい。

- ・生活費（物価）の水準：高齢の退職者などが多いロングステイヤーにとっては、年金収入や自らの貯えで余裕をもって暮らせることが必要であるため、生活費の水準は非常に重要である。その一例として、2015年3月2日公表の英 **Economist Intelligence Unit (EIU)** が「**Worldwide Cost of Living 2015**」（世界の131主要都市の生活費（生活コスト）のランキング）によれば、マレーシアの首都クアラルンプールは90位であり、一方、首位シンガポール、5位シドニー、6位東京、61位バンコク等となっている。
- ・長期滞在査証：上述のMM2Hビザは、配偶者と21歳未満の未婚の子供、60歳以上の両親を同行させる事が可能などとなっており、高齢者のみならず、子女教育を目的とする家族も含めた長期滞在希望者にとって魅力のある制度と考えられる。
- ・気候の安定と自然災害の少なさ：マレーシアの年間の平均気温は30度前後で変化の幅が少なく、台風、洪水、地震などの自然災害が少ない。



・治安・衛生面：マレーシアは、一人当たりGDP（国内総生産）が約1万ドルと中進国の水準に達しており、新興諸国の中では相対的に優れたレベルにある。

以上に加えて、現地での毎日の食生活について、日本人に親しみがあり嗜好に合いやすい中華、カレー等に代表される地元の料理が、美味しく安く食べられ、和食や日本の食材・産品も、多種多様なものが入手できることも指摘できる。さらに医療や健診が日本語や英語で安心して受けられる体制・水準にある。また、コミュニケーションという点で、現地で広く通用する英語は、未だに多くの日本人にとって難しい言語ではあるが、それでも長年教育を受けており、その他の言語と比べれば、知識があり理解できることが多いという点での安心感が大きい。また、マ

レーシアの英語が文法や語彙の正しさよりも通じることにより重点を置いていることから、シンプルな表現が多く、日本人も気後れすることが少なく話せるというメリットがある（この点に関し、高度な英語力が職務の遂行上必須である企業は別にして、グローバルに拠点を展開し世界各地で様々な国籍の役職員を雇用し、英語を共通語（コミュニケーション・ランゲージ）とする多国籍企業の多くが、欧米等のネイティブスピーカーの難しい語彙や言い回しは避け、極力シンプルな英語表現を使うことを奨励している事例が多くみられる。このことが、近年、マレーシアへの学生・若手企業人の英語留学・研修先としての評価の向上にもつながっているといえよう。）

以上のように、短期間の観光であれば、世界的に著名な名所旧跡・見どころを見学・鑑賞し、アクティビティを経験し、普段食べたことがない料理を食べるなどといった大きな異国情緒が旅の経験や楽しみとなるが、ロングステイでの毎日の生活となると重視する要因も変わってくるわけであり、その中で、マレーシアが、各種のポイントで総合的に高く評価されていると言えよう。

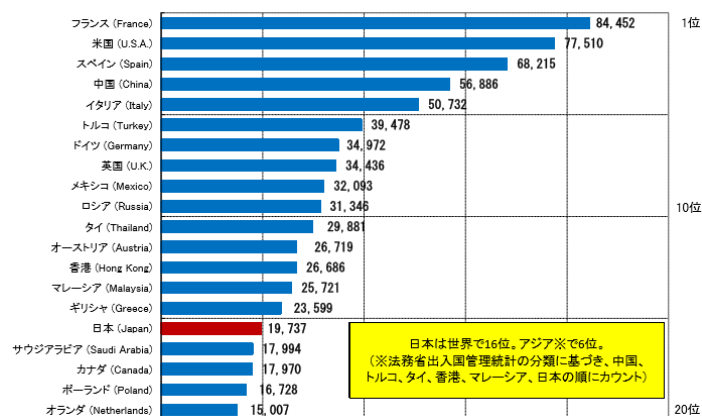
3—観光立国としての戦略的な取り組み

我が国も、近年観光業を重視しインバウンドの観光客の拡大に注力しており、その点に関し、マレーシアの様々な取り組みを参考事例として示唆を受ける点も多いと考えられる。

マレーシアにおける観光業は、早くから国の発展に必要な重要産業としての位置づけを与えられ、成長産業・重点分野として推進体制の整備と施策の実行が進められてきた。米 CNN テレビや英 BBC などのテレビ等各種の媒体で長期間コマーシャルメッセージとして放映されている「Malaysia Truly Asia」のキャッチコピーと音楽は知らず知らずのうちに親しみを覚えやすいものになっている。

このような取り組みの成果として、同国への外国人観光客数は、1998 年の 556 万人が、2015 年には 2,572 万人へと大きく増加しており、国別比較でも、図表－2（2015 年実績）のとおり、世界で第 14 位、アジアでは中国、タイ、香港に次いで第 4 位の外国人観光客を受け入れている。この数字について、人口対比での観光客数をみると、マレーシアの外国人観光客数／人口の比は 0.85（日本は 0.16）となっており、人口 3 千万人のマレーシアの観光業が、同国の経済において重要なポジションを占めていることが分かる。

図表－2 世界各国・地域への外国人訪問者数（2015 年 上位 20 位）



資料：国連世界観光機関（UNWTO）・各国政府観光局データによる日本政府観光局（JNTO）作成資料（抜粋）

また、観光分野においては、いわゆる「MICE」(Meeting (会議・研修・セミナー)、Incentive tour (報奨・招待旅行)、Convention・Conference (会議)、Exhibition (展示会))と共に、このレポートで取り上げたロングステイ客の受け入れが重要項目として位置付けられている。2017年3月のマレーシア政府の発表によれば、上記MM2Hビザの承認者の国籍別の実績(2002年ー2016年11月の期間：合計31,723名)を見ると、首位が中国の7,926名、2位が日本の4,127名、3位バングラデシュ3,393名、以下、英国2,361名、イラン1,331名、シンガポール1,258名、台湾1,175名、韓国1,174名、パキスタン958名、インド861名となっており、世界各国から数多くのロングステイヤーを受け入れていることがわかる。

以上

(本レポート中の写真はクアラルンプール：2017年5月筆者撮影)